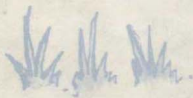
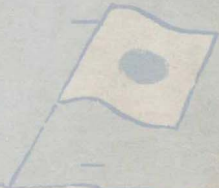


屋さがりの風景

“犬と猫と子どもたち”

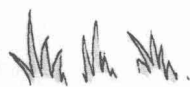
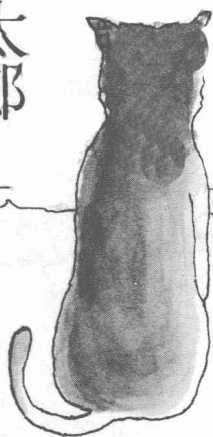
石田幸太郎



さ
が
り
の
風
景

八
と
猫
と
子
ど
も
た
ち

石田幸太郎



石田幸太郎（いしだ・こうたろう）

●一八九四年 京都に生まれる。

●一九一九年 京都大学英文学科卒業。

●一九二四年 梅花女子専門学校教授、
かたわら京大哲学科に学ぶ。

●一九五三年 立命館大学文学部教授。

●現在 ノートルダム女子大学文学部教授。
英文学、比較文学専攻。

主要翻訳書

ゴールズワージー『争闘』 エインズワース

『ロンドン塔』 マーロック『天使たちの

時』『愛の軌跡』 ハンフリー『現代の小説
と意識の流れ』

屋さがりの風景

●犬と猫と子どもたち

昭和五十年一月二十日 第一刷発行

著 者 石田幸太郎

発行者 大邊 豊

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区九条北ノ内町十一

電話 京都（六八一）四四三五

印刷所 東洋印刷株式会社

© Kōtarō Ishida 1975 0095-111000-7159

Printed in Japan

落丁、乱丁本はお取り替えさせていただきます。

（定価はカバーに表示してあります）

昼さがりの風景

犬と猫と子どもたち——目次

子どもたちの情景

風呂敷さん

9

肩車

18

狸の玉ころがし

33

目玉の松っちゃん

38

ムクの実とクワの実

43

朝一番の風呂屋

50

寝ねいやい

53

猫の日記から

昼さがりの猫

59

タマの旅日記

74

床下の決闘

84

子猫エレジー

95

犬貸し屋

115

スキヤキの宴

118

三つの風景

時計の音

125

文学のなかの猫

129

永遠の子どもたち

136

あとがき

146

昼さがりの風景

犬と猫と子どもたち

装幀・挿絵

井田
照一

子どもたちの情景

風呂敷さん

伊藤一平は明治二十七年八月十五日午前二時頃五百匁たらずで生まれたということです。父の片手に乗るくらい小さく、母がそれを見て、この子が育つかどうか、吐息をついたと申します。その三年前に生まれた女の子は、やはりそれ程の大きさでしたが、生まれて間もなく死んだというので、この子も、やはり駄目かも知れないと思うと、悲しみがこみ上げてきて思わず涙が溢れ出てきたそうです。

しかし父は、母を慰めるためか、

「こいつは、生まれてきた時大きな声で泣いたというではないか。大きな声で泣くというのは、どこか、からだに力があるということではあるまいか。泣くのはやめなさい。大丈夫じゃ」

と励ましたということです。医師も産婆も産声うぶごえの大きな子は、生命力が盛んな証拠で育つこと疑いなしといったようなことを、母にハッキリ告げたそうです。それで母も一応は安

心したものの、でも心配で、心配で、やはり明日は息をしなくなるのではないか、明後日^{あさって}は死ぬのではないかと、ビクビクおびえていたそうです。

でも五日経ち、十日経ち、半月経ち、一月経ち、半年経っても、どうやら異状なく、のべつミーマー泣いてはいても案外、元気にその辺を這っている姿を見ると、思わず微笑も漏らしたことだと、母は後年^{こうなん}一平に言ったことがあります。

母は乳があまり出ませんでした。近所に母の友達で同じ頃に^{ふたつき}（二月前ということでした）子どもを生んだ人がいましたが、その人は大麥乳がたくさん出て、自分の子にたっぷり飲ませたと、更に充分一平に飲ませることができたそうです。運のいい子と、母も言い、近所の人たちも評判したそうです。ドライミルクもなにもなかった時代のこと、好運という外はありません。しかしその婦人は、ただ自分みたいなものがこの子の役に立って嬉しいことじゃと謙虚な調子で言ったことがただ一度だけあったということです。

その婦人の子は、遅しく大きくなってゆきましたが、一平は、相変わず小さく、病気がちでした。ただ一平は歩くことが好きで、三つか四つ頃になるとのべつ歩いていました。家の屋敷内は空地が多く、その空地をあちこちと歩いていましたが、しまいには、家の外へも無断で出かけ、母に心配をかけました。十町（今日でいえば一キロ以上）ほども

あるところへ、トコトコと歩いて行きました。

一平の家は京都洛西の嵯峨にあって、嵐山に近く、大堰川おおいがわが、家のすぐ前に流れていました。川に落ちたら大変と、母はどんなに気をつかったことでしょう。

「川のそばや、溝に近いところへ行ったらあきまへんえ。お馬さんやモウモウのいるところは近よらんようにするのえ」

そして小さな風呂敷の中に、伊藤一平の名札を入れ、それに町名や父の名を書いて——父は下嵯峨村（今の右京区下嵯峨）の村長をしていましたので、村では父の名はよく知られていました——変な時や変なところでこの子を見つけた人は、親のもとに知らせて下さるように、と書いてあったのだそうです。母は気になって、気になって、しかたがないのですが、といって歩けるようになった一平は、家の中でおもちゃで遊ぶことを全然といていくらいしないし、気がむくと、いろんなところへ出かけて行くのです。お寺やお社やしろ、また小さな山が近くに多いので、そんな山まで、出かけてゆきます。せがまれて梅干を入れたおにぎりを一つ竹の皮に包み、何か季節の果物や焼芋といったものを一つその風呂敷の中に入れて、持たせてやるというわけです。

一平は三高へ入って二年になるまで、一切——いや、卯や鯉節、ちりめんじゃこなどは

食べましたが――動物性のものは口にしませんでした。牛乳も一切飲みません。その頃の牛乳は、この頃の薄い水のまざったようなのは違って、濃くて臭くて、とても飲めたものではありませんでした。母は一平が四つになった頃から牛乳を毎日一本ずつ飲ませようとしたが、それがイヤでたまらず、ある日、川岸に立って、牛乳瓶を逆さまにし、ジャーッと流しているところを母に見つかりまして、涙と共にひどく叱られました。

母は次に、「次亜燐」という鉄分を主体にし、それに微量の燐の類を加えた、とても飲みにくい薬を飲ませました。小量ずつなので、眼をつむって飲みました。今思い返して、母の必死の養育の努力を有難いと思わずにはいられないで、一平は心の中で今でも手を合わせているのです。

あだしごとはさておき、例の風呂敷包みのことですが、そんなものを片手にぶらさげてそこいら中をのべつ歩いていたものですから、村中の評判になって、一平は「風呂敷さん」と綽名あだなされました。

悪童たちは、一平の姿を見ると、

「風呂敷が歩いていよる。風呂敷のあほやーい」

と囃しました。しかし一平は、そしらぬ顔で、別に気にもとめず、そのまま歩き続けてい

ました。ある日年上——そう年は二つ三つも上かな——の男の子が二人がかりで、その風呂敷包みを取り上げようとなりました。丁度乳兄弟に当たる——一平に乳をくれた婦人の背の高い太った子が、近くにいて、駆けて来、二つも三つも年上の子を突き飛ばして取り戻してくれました。本名だったか綽名だったか、高ちゃんといい、相撲取りみたいだと言われていたのです。その子は、いつでも陰になり日向になって一平をかばってくれました。あとで土地の素人相撲の大関になりました。

*

嵐山のそばを流れている時は大堰川と言い、その上流を保津川ほうずがわといって急流ですが、大堰川は、一平の家のすぐ下流で大河たがの桂川きと小川がわの高瀬川とに別れます。京都の木屋町のそば、鴨川かみ（または賀茂川、加茂川と書きます）の西に、角倉了以かいたきが開鑿かいさくした高瀬川がありますので、こちらの高瀬川を西高瀬とも言いますが、この小川は丹波から筏いかだにして流してきた材木を嵯峨に集め、更に一部は京都市の三条千本せんぽんへ送るという役目をもった小さな流れでした。狭い、浅い小川でしたがその川さえ母は一平を近づけないように、気をつけさとしてもいました。

大堰川は、平素は静かな澄み切った流れですが、五月雨きみだれごろや秋の台風の頃になると大暴れあはれしてよく洪水になることがあります。雨が降り続き、水嵩みづかさが増してくると、つつじやさつきなどが、根こそぎ押し流されてき、大きな濁水の渦が次々とおっかぶさるるように押し寄せてくるのです。渡月橋は、そのころは、大水のためになんども打ちくだかれ、流されてしまったことがあります。家の広い勝手の中に舟がはいっているのを一平は見たこともありました。

ある年の六月（一平が五つ頃だったでしょうか）、激しい雨が二日も続いて、濁流が、かなり激しい勢いで桂川の方に飛ぶように流れていました。ところがその日一平が家にいないのです。家の近くにも見当たらないのです。母は「あの時ほど心配したことはなかったんえ」と十年も立ってから一平に話したことがありました。

その大雨の二日目の昼過ぎ、一平は渡月橋を渡った嵐山の山つづきの高台の法輪寺はうりんじの境内、虚空蔵さんこくぞう（それは京都で少年少女が十三歳になった時厄除けに参詣するお寺です）の寺内に、野良猫と一緒に眠っているということがやっとわかりました。乳兄弟の高ちゃんちやんの言うところによると、雨がやんですぐ渡月橋が流失する一時間程前に、一平と二人で